音楽の処方箋

文／中 東生

第5回 スイスに居を構える有名人

スイスに移住を希望する有名人は驚くほど多い。永世中立国という立場とスイスフランの安定、銀行や不動産への信用ももちろん重要な要素を占めているだろうが、ある分野でトップを極めた人間にとってスイスという国は、安心して生活できる国なのだと思う。

オペラ界で40年以上も「コロラトゥーラ（長く連なる音階を"真珠玉が転がるように"母音で歌う超絶技巧）の女王」というタイトルを保ち続けて来た奇跡的な存在であるエディタ・グルベローヴァもその１人である。スロヴァキア人の彼女はウィーンへの亡命を経て、その後スイスで暮らし始めた。チューリッヒ郊外のツォリコンに構えるお屋敷は、自身の「唯一の趣味でセラピー」という土いじりの甲斐あるロマンチックな庭と、大きな自画像がいくつも並ぶ広間の一角にある浮世絵のコレクションが日本通を感じさせる、居心地のよい邸宅だ。彼女にとって日本のファンはいつも特別な存在であったが、そんな彼女がウィーン国立歌劇場来日直前インタビューで、「今回の『アンナ・ボレーナ』で大切な日本の皆様とお別れしなければならない」と告白したのである。60代後半の彼女が、まだコロラトゥーラソプラノとして第一線で活躍し続けている事自体が奇跡なのだが、だからこそファンにとっては、いつかは訪れるであろうがまだまだ先と思いたかった引退を突きつけられて、想像以上に残念なのである。ヨーロッパではまだ正式な引退宣言はしていないそうだが、2015年以降の予定表を意図的に空白にしているという。日本でも愛され続けたグルベローヴァの軌跡を振り返るとともに、幸運な事にチューリッヒで彼女のオペラがまだ聴ける環境にいる皆様に、最後のチャンスをお知らせしたい。

エディタ・グルベローヴァは1946年に現在のスロヴァキアのラチャ村で、ドイツ系の父とスロヴァキア育ちのハンガリー人である母の一人娘として生まれた。貧しく病弱な幼少時代だったが、彼女が５歳くらいの時から母の働く葡萄畑では、エディタの歌声が遠くまで聞こえていたという。12歳の時に放送児童合唱団のオーディションに合格してから音楽への道を歩み出し、プラティスラヴァ音楽院在学中の1968年にプラティスラヴァ歌劇場の『セビリアの理髪師』でロジーナを歌ってデビュー。しかし彼女のキャリアは困難の連続だった。バンスカ・ビストリカ歌劇場の専属となっても苦難が続き、ウィーンへ脱出する決心をする。それは、ドイツ人の父親が戦後、ドイツに強制送還されるのを免れるためスロヴァキア籍を取得したにもかかわらず、共産主義の生き方とぶつかり、投獄され、釈放された後は妻と娘にも恐れられるような精神的不具者となった過去から、彼女が憎む共産圏外へ出る唯一の道だった。

ウィーン国立歌劇場でのオーディションに合格し、契約書を手に帰国した彼女を待ち受けていたのは、スロヴァキア政府の許可無しで西側と契約したという非難と脅しであった。それでも国は、国家間の摩擦を避けるために何度かスロヴァキアとオーストリアを往復する自由を与えてはいたが、それすらも閉ざされる前に、と1971年に母と共に亡命した。グルベローヴァはその時臨月で、長女が生まれてしまっていたら、３人での亡命は不可能になっていたと語る。その一週間後、共産党入党を拒否しているために音楽学の教授になれないでいた夫も後を追った。しかし、ウィーンでも決まった役しか与えられず、４人の生活全てが彼女の肩にかかり、「涙と共にパンを食べた」と当時を回想するが、その辛酸を舐めた時代こそ、彼女の天賦の才能をさらに伸ばし、どんな共演者とも客観的にうまく合わせられる音楽的基礎を培う役にたったというのだから、信念を貫けばどこかでチャンスに巡り会えるものなのだ。長い下積みの後、巨匠カール・ベームに見出されスター街道をまっしぐらに登り詰めるかたわらに、離婚とその直後の前夫の自殺に見舞われる。1983年以降は、公私共にパートナーとなる指揮者のフリードリッヒ・ハイダーと世界的に活躍するが、彼とも数年前に別れている。

スイスに移住したのは1985年であり、その理由の１つに、オーストリアの重税を挙げている。その後1993年に、普通は10年居住した後に得られるスイス定住権を「極めつけの例外」として授与された。文化人でこの「例外」の対象になったのはそれまでに、トーマス・マン、エリザーベト・シュヴァルツコップ、ニコラウス・アーノンクールの３人だけであった。

移住当初、その条件として、１シーズンに10公演以上チューリッヒ歌劇場で歌う、というものがあり、チューリッヒ歌劇場に登場する機会もどんどん増えていくのであるが、この10年以上、頑にチューリッヒ歌劇場から姿を消してしまっていた。総支配人ペレイラとの確執は周知の事実であるが、原因は、グルベローヴァの次女がバレリーナとして当劇場に出演中、舞台上の事故に見舞われた際の保証の姿勢があまりにも非人道的だったから、と関係者は話す。そして、来シーズンからペレイラ氏がザルツブルグに移るのを待っていたかのように、プログラムには彼女の当たり役、エリザベス一世が主役の『ロベルト・デヴェリュー』の再演と、『異邦人』のプレミエがクレジットされた。この『異邦人』が彼女の最後の新レパートリーオペラになるらしい。これは何が何でも見逃せない。

普通、女性歌手は年齢と共に声も重くなっていくので、グルベローヴァのように、デビュー当時のレパートリーとほぼ同じ声質のオペラを40年も歌い続けることは至難の業である。また、更年期を迎えると、声の支えが安定しなくなる事が多い。しかしグルベローヴァは、役選びの賢さと「神様から与えられた」自分の声を何がなんでも守るという執念のような生真面目さで、60歳後半まで「コロラトゥーラの女王」としてトップに君臨し続けているのである。そしてその奇跡を実現させた基礎は、下積み時代の苦労であることは彼女も認めている。ずば抜けた才能は持ち合わせていたものの、次々と降り掛かる困難を乗り越え、「奇跡的に」手に入れられたトップの座にあぐらをかくことなく、毎公演全力を尽くし、高いレベルを維持し続けてきた彼女の芸術に触れるだけで、パワーをもらえるのである。

自分の年齢や可能性に限界を感じている方に、是非下記の処方箋をお試しいただきたい。

エディタ・グルベローヴァ公演予定《チューリッヒ歌劇場》

『Roberto Devereux』（ガエターノ・ドニゼッティ作曲）
2012年９月28日、10月９、14、19日

『La straniera(異邦人)』（ヴィンチェンツォ・ベッリーニ作曲）
2013年６月23日、28日、７月２、６、10、14日